

AI とこれからの社会

内山 節 (NPO 法人・森づくりフォーラム代表理事)

二十世紀初頭のアメリカで、画期的な生産技術が開発された。といっても新しい機械がつくられたというようなことではない。職人的な技に依存していた工場を、単純労働に置き換えることに成功したのである。職人的な物づくりの過程を分析し、単純労働の組み合わせによって工場を動かせるようにする。今日的に言えば、それはソフトウェアの開発だった。この成功は、その後の世界を大きく変えていくことになった。効率的な大量生産が可能になっただけでなく、労働者たちから仕事を通して技を深めていく楽しさ、労働の喜びが失われ、人々は消費や娯楽に人生の楽しみを求めるようになった。

現在、世界でもっとも AI 化がすすんでいる国は中国だといってもよい。国中に監視カメラが張り巡らされ、携帯の位置情報からも誰がどう動いたかが把握される。キャッシュレス社会は、カードをとおして誰がいつ、何を買ったかも、もちろんネットへの投稿内容や携帯の会話も監視下におかれている。そしてカメラやカード、ネット、携帯の膨大な情報を分析し、危険人物を割り出していく仕事をおこなっているのが AI である。

二十世紀初頭のアメリカで発見された改革が、ハード的な意味で画期的な技術を伴わなかったように、今日の AI の展開も、ハード的には新しい技術というほどのものではない。AI 技術は、すでにこの社会にさまざまなかたちで浸透しているものであり、たとえば券売機や銀行の ATM も人

工知能が内蔵された機械だということができるし、工場に数多く導入されている産業用ロボットも、人工知能が動かしているといってもよい。とすると、なぜいま AI が論じられるようになったのだろうか。

その理由は、AI によって、いままでできなかったことが可能になると考えられているからだろう。では何が可能になったのか。人工知能がもっとも得意とするのは、膨大なデータから関連性を引き出すという作業である。それを国民監視システムに使ったのが、現在の中国である。とともに一部の業務を AI 機能をもつロボットに置き換えていけば、大きな人員削減、合理化ができるのではないかという「期待」と不安も広がっている。ただしこの分野についていえば、限定的なものになるだろう。なぜならそれはコスト問題であり、いまでは ATM が銀行経営の重荷になっているように、AI 化はかえってコストがかかるという場合もあるからである。さらにロボットは、内蔵されたプログラムに従って何かを提案することはできても、プログラムにない斬新な発想をすることはできない。AI に依存しすぎれば、長期的には経済の力を衰弱させることになるだろう。

道具として限定的に AI を使える範囲とは何か。この議論をせずに野放しに AI 化をすすめれば、生まれるものは、監視社会と単なるルーティングだけで運営されていく、力のない社会である。